



日本マス・コミュニケーション学会
総務担当理事
鈴木雄雅
先生

上智大学文学部教授。博士（新聞学）。専攻は新聞学（ジャーナリズム史、国際コミュニケーション）専攻。オーストラリア学会理事、2008年から日本マス・コミュニケーション学会総務担当理事。

時代とともに変化する 学会員構成 — 事務委託で広がる可能性 —

変化する研究内容と 担当が変わることの弊害

— 歴史のある学会ですが、時代の変化とともに変わってきたことはありますか？「1990年前後から新聞以外のさまざまなメディアがごく一般的になり、それまで特化していたジャーナリズム論に加えて娯楽や広告、報道の影響効果などを研究する人が増えてきました。さらにここ10年ほどの間では、マスコミの現場で働かれている方ではなく、他分野にしながらマスコミ研究をする方が増えてきています。社会福祉や教育に携わっている方が、それぞれの分野に関することをマスコミがどのように報道したかということや、メディアリテラシーという側面からの研究を行ったりもしています。インターネットをはじめとした多種多様なメディアが発達することで会員の裾野がかなり広がってきたようです。

また、他の学会にも言えると思いますが、会員の構成も以前とは変わっています。学会員というものは高等教育機関における教育者か研究者が多かったのですが、最近は大学院生や若手研究者の割合が高くなっています。これは我々にとっていい刺激に

日本マス・コミュニケーション学会

1951年日本新聞学会という名称で設立。2011年に創立60周年を迎える。マス・コミュニケーション研究の発展に力を注ぎ、多様化するメディアの変化に対応するため、1992年に名称変更。日本新聞学会時代の会員数約600名から、現在は1400名ほどに増えた。マス・コミュニケーション一般を研究対象として研究発表会などを行う開かれた学会を目指している。

なっています。ものの見方や考え方、読み取り方が、伝統的な観念や枠組みから離れていたりするので、その部分について議論や発表をする場ができます。これはさまざまな世代にとって刺激的なことだと思います」

— 現在、会員数も約1400名にまで増え、運営は順調ですね。

「悩みはあります。本学会の趣旨に賛同して援助をしていただく賛助会員という、おもに法人を対象としたものがあるのですが、その賛助会員さんが辞めていってしまっているのです。バブル崩壊後は大手マスコミも辞めてしまって……。時代に合わせて新興メディア企業さんなどが賛助会員になってもらえたら、と考える一方、本学会には歴史やステイタスがありジャーナリズム教育では一番という自負もあるせいか、それほど積極的な打開策は講じていないのが現状です。個人的には、できればもっと多くの企業の賛同を得たいという思いはあります。辞めてしまう原因には、賛同いただいた会社の担当者が異動になってしまったり、担当部署自体が頻繁に変わったりすると、“なんでこの会員に？”と話が振り出しに戻ってしまうせいもあります。引き継ぎがうまくいっていないんですね。

異動して引き継ぎがうまくいかないというのは、学会内にも似たようなことがあります。事務局の問題です」

ACNetで事務業務委託を再開 1年後の結果に期待

— 学会事務の引き継ぎの問題には、長い間苦労されてきたのですか？

「そうですね。2002年の後半から（財）日本学会事務センターに委託をしていたのですが、多くの学会が被害に遭った2004年の同センターの倒産で、事務業務を2002年の状態に戻さざるを得なくなってしまいました。その後も学会規約で、“会長または総務担当理事が所属する機関に事務局を設ける”という決まりがあるので、会長が変わるたび、期が変わるたびに事務局は移転しなければならなくなってしまいました。事務局員への引き継ぎ作業も生まれます。また、会員管理から大会運営までを本学会事務局で行っていると、本来の研究活動に手が回らないなど、悪影響が出てしまいます。このままでは本来考えていた事務局業務のスリム化なんていうことは、とても実現できない。そこで新たに委託することに決めたのがACNetです。

他の事務代行業者は、『会費管理も含めてすべて』というところが多かったのですが、ACNetは逆に、『会費以外、会員管理などの煩わしい部分や会員へのサービス部分を』というのがACNetを選んだ理由です。以前の倒産事件の苦い思いをまだ忘れていないので。また、学会の立場で運営を考えてくれている点も好印象でした。

大会で発表する予稿をWebに載せるなど、新しい試みも好評です。HPのリニューアルがサービスメニューに入っているのも魅力ですね。これだけやってもらえれば、今後は事務局がどこに移っても大丈夫かもしれません。1年後に期が変わるので、そこの引き継ぎがうまくいくかどうかを注目しています」